

1. 酔いどれの後輩

俺は自分の通う大学の近くにある学生マンションに来ていた。

「わ、先輩っ、ほんとに来てくれたんっスか？」

インターホンを鳴らし、しばし待つとサークルのひとつ下の後輩が迎えに来てきた。

「マジ感謝ッス～～！！」

後輩は俺の手を握ると上下に大きく振ってきた。

いきなりの急接近。童貞の俺は女の子に手を握られるなんて経験は初めてだった。柔らかい手のひらの感触に包まれると、それだけで脈が速くなってしまう。

「ぬへへへ、へへえ～」

後輩はもうできあがっているらしく、シラフでは出せないような卑しい^{いや}笑い声を発した。その顔は赤く、気分を大変よさげ^{ひとなつ}にしている人懐っこい。

俺はまだこんな真^{まっぴるま}昼間から、なにをそんなに酔っぱらってるのかと指摘せずにはいられなかった。

「いいじゃないっスか～♡ 今日金曜日っすよ？」

「……ええ？ そんな『だらしないやつ』って失礼ッスね～、先輩はまじめすぎるッスよ～♡」

俺はやれやれと思いながら靴を脱いで玄関に上がった。乱雑に物が置かれて狭くなった廊下を歩き、後輩の住む部屋に突入する。

「ささ、こちらにどうぞッス♡」

そのワンルームはあまり女性らしくはなく、ベッドの枕元に置かれた巨大なトリケラトプスのぬいぐるみ以外はビジネスホテルのようだった。

テレビの前には二人がけにしては小さめの座椅子が置かれていて、俺はそこに座るように促された。

「先輩もいっしょに呑むッス♪」

座椅子に腰をかけて、カバンを置きながら部屋をそれとなく見わたし

ていると、1リットルのタンブラーになみなみと注がれたコークハイがやってきた。

俺が座る近くの床、つまりは木のフローリングに直接ドンと置かれたのだが、その際に中身がすこしこぼれた。とても行儀が悪い。

「汚くなんかないっすよ。細かいことは気にしな〜い」

タンブラーに顔を近づけて一口飲むと、コークハイはかなりきつく喉を焼いてきた。

これはなんだと思って後輩の方を睨むと、流し台の下にアル中御用達^{ごようたし}の4Lペットボトルに入ったウイスキー（業務用でアルコール度数40度）がドンと置かれていた。開いた冷蔵庫の中には2リットルのコーラが何本も入ってるのも見えて、コークハイを常飲してるだろうことがわかった。

コーラとウイスキーの比率は1：2ぐらいだろうか？ 意外と飲みやすく、うっかりすると早々に酔っぱら^{そうそう}ってしまいそうだった。

「わ、気が利くッスね〜、先輩さすが〜」

俺はこうなるだろうと思って買ってきたバターピーナッツ、アーモンド、ポテチ、スルメを開封し、二人の手が届きやすい場所に置いた。

ゲーム機にROMを入れて電源をつけ、遊ぶ準備も進めていく。

「かんぱ〜いっ！」

宴の準備が終わるとタンブラーがぶつかりあい、コンと小気味よい音を立てた。

今日俺がここにやってきたのは、後輩がアクションゲームで詰まってしまって、先に進めないというので手伝いにきたからだった。

ある日、サークル室でそのゲームが話題になり「もう全然クリアできないんすよねえ……」と後輩がこぼすので、全ステージクリアしたことがある事を話し手伝おうかと言うと「さすが先輩〜！ 助かるッス！」と大歓迎されてしまったのだ。

さいわいにもそのゲームは二人同時の協力プレイが可能で、二人で遊

ぶのに都合がよかった。かなり昔にクリアしていたから話を聞いてもう一度遊びたくなかったし、ソロプレイとは違う新鮮な気持ちでプレイできそうに楽しみだった。

「このボスが倒せないんッスよ～」

セーブデータをロードすると、後輩が詰まったという序盤のボス戦からゲームは再開された。

「こいつが強すぎて嫌になったんスよ。ううう、難しいッス……！」

後輩はボスの出す追尾弾をうまく回避できず苦戦をしているようだった。俺はまかせてくれと言って前が出る。が……、

「先輩ー！！ そんなところにつっこんじゃダメっす～！！」

得意げなことを言ったのにも関わらず、間違った位置取りをして危険地帯につっこんでしまった。連続で被弾してしまい、それを見た後輩が叫び声をあげる。

俺は勝手に違うんだと言い訳をしながら動きを修正していった。プレイヤーが二人いると、敵の動きもソロプレイの時とは異なり、そこで被弾してしまいがちだった。

「まったく……、しっかりしてくださいッス……。って、おお、やっつけたッス、イエ～イ！」

しかしまあ、あまり上手に避けなくても適当に攻撃をしているだけであっけなくボスがやられていった。

「わー、やっぱり二人でするとらくちんッスね～」

それもそうで後輩が詰まっていたところはまだ序盤も序盤で、二人プレイならごり押しが可能だった。ソロプレイでも何回かリトライしたら勝てそうなもので、普通にプレイして詰まるようなところだとは思えなかった。以前の話では1時間も詰まって投げってしまったというが、ゲームが苦手なのだろうか。

「えっと……、実家にゲームがなくてでスね、そのころゲームは友達の家でするぐらいであんましたことないんスよ。こいつを買ったのも大学

に入ってからで」

大学に入ってからというとなんと2カ月ぐらいだ。それにしても後輩の動きは悪くはなく、センスがないとは言えなかった。本腰を入れてしっかりやればけっこう上達しそうだ。

「え、そうっすか？ てへへへへ〜」

後輩はおだてられると素直に喜んで顔をほころばせた。

今日はどこまでゲームを進めるかはわからないが、もしエンディングまで進めるとなるとかなり長丁場になりそうだった。

「うりうりうり〜」

このゲームは高難易度で、ゲーム初心者にとってかなりハードだと思えたが、後輩は楽しんでいるようだった。俺は後輩が死なないようにライフを分け与えたり、死んだ後輩を自分の身を犠牲にして復活させるなどフォローをしながら、カジュアルにゲームを楽しんでいった。

あんまり真剣にプレイしてもアレだから、気持ちをラクにして酒とつまみを飲み食いながら適当にしているが、とてもおいしく感じられる。

後輩はこちらの動きを手本にして、教えてもないのにみるみる動きがよくなっていきセンスの良さを感じさせた。

見どころのあるやつだと思いながらゲームを進めていったが、3時間ほどたったのち、ゲームにすこし飽きてきたのか唐突な言葉が後輩から投げかけられてきた。

「ところで〜、先輩って初心^{うぶ}な人ッスよね〜」

そう言うと後輩はゴクリと酒を飲み、口からふいーと息を吐いた。それはこちらを小馬鹿にするような調子で、いったい何が言いたいんだと言葉を返した。

「にひひ……、何が言いたいんスカねえ……♡」

後輩はタンブラーを置くと、ふくみ笑いを浮かべながら肩をくっつけてきた。絡^{から}み酒だとはわかっているが、女の子の柔らかな身体が当たると、その箇所が急に熱を持ってドギマギとしてしまった。

「どうしたんスか～？ 逃げちゃだめッスよ～♪」

その感触はとても心地のいいものだったが、恥ずかしくなって身を離すと、その分後輩はにじり寄ってきた。

「せんぱあ～い♪」

これ以上逃げると座椅子からずり落ちて、タンブラーを倒して酒を床にぶちまけてしまいそうだった。

嬉しいのではっきりと拒絶したくない気持ちもあり、わかったわかったと言って俺は後輩を押し返して元の位置に座る。

「せんぱい……♡」

後輩は俺の身体を撫でてきたので、その手はなんだと指摘する。

「まったく……、はあ……、そういうところが初心なんスよ～♪ 堂々としてればいいのに～♪」

言葉が通じそうにないので諦め、俺はその場から動かずされるがままに後輩のスキンシップを受け入れることにした。

「むふふ、ゲームいっしょにがんばろうッス♡ せんぱ～い♪」

ゲームの操作中にも後輩は悪戯をしてきて、俺の首筋にほおずりをするように近づいてきた。うなじにほっぺたが当たり、熱い吐息がかかるゾクゾクと感じてしまうのだった。

「……ふふう、楽しいッスね、せんぱいっ♪」

反応を楽しむかのように後輩はさらに大胆になってきて、さらに密着を深めてきた。俺の背中におっぱいが撫でる感触がすると、気が動転してしまい操作を誤り、自機が穴に落ちて死んでしまった。

「おやおや、先輩どうしたんッスかあ？ そんなミスするなんてらしくないッスねえ？」

クククと笑いながら残された後輩がステージを進めるも、敵にぶつかりあえなく死んでしまった。

「ああ、やられたッス～」

俺はそれを見ながら今までチビチビと飲んでいたコークハイを、グイと呷り深く息を吐いた。やけにうまくて肝臓が温まる。

横を見ると後輩はゲーム画面を見て残念そうな顔をしていた。俺に顔を見られていることに気づくとニヒヒと笑って目を合わせてくる。

そのまましばらく見つめ合って変な空気が流れるが、どちらからともなくゲーム画面へと目を逸らして緊張が解けた。

「～♪」

後輩はなんでもなしのようにゲームを再開するが、俺は気が気でなかった。

なんだこれは。おっぱいを押しつけてきたり、見つめ合ったりなんかして……。もしかするとこれはセックスに発展する流れなのか？

^{いぶか}訝しがって後輩をチラリと見ると、頭の中に一瞬だけ裸になった姿が思い浮かんでしまった。すると半勃起だったペニスがムクムクと膨らみだして股間が窮屈になってしまうのだった。

それからもしばらくゲームを遊んでいったが、その間も後輩はボディタッチだかセクハラだかを続けてきた。

股間の盛り上がりには後輩は気づいているとは思いますがお構いなしに行為は続けられ、二人は特別なことは何もしてないという風^{ふう}を装った。

サービス精神^{おうせい}旺盛なのか、拒否しないでいると行為はどんどんエスカレートしていき、楽しく遊んでいたゲームはほっぽりだされていった。

「先輩ってM^{エム}ッスよねえ……。気持ちよさそうにしているのがまるわかりッス……。♡」

後輩のあやしい手つきが俺のお腹や太ももを撫でていった。酔っているせいで変な気持ちになったのだろう、後輩はセクハラをするのが楽しくて仕方がないといった様子だ。

「先輩からも触ってほしいッスよお……。♡」

俺は童貞で、女性に意識して触れるのはこれが初めてでかなり抵抗があったが、後輩にうるんだ瞳を向けられたので、覚悟を決めてお腹に手を伸ばし優しく撫でていった。ためらってしまえば^{からか}揶揄われてしまうのは目に見えているので、堂々とした手つきを心がけていく。

「んんっ……♡」

サワサワとわき腹や背中を撫でていくと、後輩は身体をよじらせて気持ちよさそうな声を漏らした。女の人^の身体を触るのは初めてだが、敏感な反応に嬉しくなってしまう。

そして後輩がついに俺の股間に張ったテントを撫でてくると、痺れるような快感が走り、パンツの中でカウパーがピッと^{にじ}滲み出るのを感じた。

さんざん気持ちを煽られていた中にいちど快感が生じてしまうと、もう瞬間湯沸かし器のように一気に欲情してしまっ^て、もどかしくて仕方がなくなってしまう。

「ふふ、いいッスよね先輩……♡」

後輩は俺の穿いていたズボンを脱がせにかかってくると、俺は早くされたくて腰を浮かした。後輩が協力的な態度に笑みをこぼしながら引き抜くと、ズボンは簡単に脱がされてテントを張ったトランクスが露わになった。

「わ、すごいッスね……、先輩♡」

女の子に股間を見せるのは初めてだが、こんなふうに好奇の目で見られ視姦されるとは思わなかった。テントの頂点にカウパーでシミがついているのがなんとも恥ずかしい。

「どれどれ～？ 先輩はどんなモノをお持ちッスかね～♡」

トランクスもすぐにおろされてペニスがピョンと飛び出した。

「先っぽもう濡れてるッス……♡」

包茎の余った皮の内側で、先走りが出て先端を光らせていた。

「……はあ♡」

何を興奮しているのか熱っぽい表情でペニスをしっかりと観察され、かなりの間があった後に、ようやく後輩の手にしっかりと握られた。

「もうこんなにアツアツになっちゃってるッス……♡」

ペニスはすでに準備万端になっていて、手を動かされてカリ首をしごかれると、すぐに本格的な気持ちよさが生じた。どうやら後輩はかなり

やり慣れているらしく、相当な手練れだと感じた。

「にひひ、いい感じッスね……♡」

先端から分泌されるカウパーの量を見て、後輩が嗜虐的な笑みを浮かべた。童貞をあっけなく射精させたくはないのか、その手つきはうんと優しかった。もし手を速く動かされたら瞬殺されてしまうから、その気遣いに大変助けられた。

「せんぱ〜い、どうッスかねえ……♡」

自分でするよりも何倍も気持ちいいと言うと、後輩は「ふふっ」と嬉しそうに笑って、顔と顔とを近づけてきた。

「そうッスよね〜♡ 先輩大好きッス〜、チュッ♡」

俺は座椅子に背をあずけて脚を伸ばしていたが、後輩は太ももの辺りにまたがり、軽い手コキをしながら頬にキスをしてきたのだった。寄りかかるように密着してきたりもして、熱くなったおまたが太ももに押しつけられた。

「チュッ、チュッ〜♡ はあ……、せんぱいっ……、いつでもイっていいッスからね〜。遠慮なく出してくださいッス〜♡」

左右の頬や唇に軽いキスを何回もまぶされながら、後輩は手コキを強めてきた。わずかにとろけたような表情がとてもエロく、肩を抱いて身をゆだねていると、どんどん興奮が増していった。

「こんなに悦んでもらえて、うちも嬉しいッス〜♡ ムチュ〜〜っ♡」

……！？ いきなり後輩は俺の口に舌を入れてきた。

「チュウウウ……♡」

そのまま唇に吸いつかれながら、口内を舐め回されると頭が真っ白になってしまった。

「チュパァ……♡ チュッチュウウ♡」

遠慮を知らないこんなに深いキスはもちろん初めてのことで、ヌルリとした舌同士が触れ合う感触はとても異質だった。

「……チュパァ♡ チュウウ……♡ つふふう♡」

身体を硬直させた俺の反応が面白いのか、後輩は深いキスをしながら笑い声をこぼしていた。そうしながらも手コキをし続けるものだから、たまったものではない。

「ほおら♡ ぼーっとしてないで先輩も舌を動かしてくださいっス～♡
レロレロ……、ちゅっぱあ……♡」

言われたとおりに舌を動かすと、舌がヌメる奇妙な感触をさらに強く感じて意識が囚われていくのを感じた。

「んっ、ちゅっ、ちゅっぱあ……♡」

そして二人は軽く抱き合いながら、しばらく深く穏やかなキスを続けていった……。

「ちゅっ、んっ、はあ……♡」

俺はその口づけを初めはなんでもないことのように思っていたが、舌同士が触れ合う異様な感触が、不意に強い興奮に結びついた。

「れろれろ、れっー……♡」

初めは舌のグロテスクさに慣れなくて心の片隅で拒絶していたが、後輩の漏らす吐息の音色を聞いているうちに、だんだんと舌の絡め合いが、心の結びつきを深く感じさせるものへと変貌していったのだ。

それは恋慕そのものの癖になるような甘美さを持っていて、俺はもっと味わおうと舌を高速で動かしてしまう。

「……っ♡ ふふっ、れろれろれろ、れろれろれろれろっ……♡」

すると後輩もそれに合わせて舌を速く動かしてきて、高速に舌先が合わさった。舌粘膜同士が合わさる感触は、場合によっては気色が悪いととれるほど異質だったが、今の俺には極度の興奮となって視界が白く染まっていった。

「せんぱい、目え回してるっス……♡ れろれろれろ、れーろれろれろれろっ……♡」

朦朧として途中でやめたくなるほどの精神的な気持ちよさを感じたが、後輩は止めてくれず俺はさらに追い込まれていく。

「すごい顔してるッス……♡ れろれろ、れろれろれろっ……♡」

こちらはもう舌を動かすこともできず、精神的なマウントを完全にとられて一方的な百裂舐めを受けると、何もかも奪われてしまうような感覚がした。

虚ろになる意識の中で、遠くにあった射精感が一気に近づいてくるのを感じた。あっという間に手遅れなぐらいに快感は膨れ上がり、腰が勝手に前に突き出ていく。

「ンンッ、はあっ……、いいッスよ……♡ 遠慮せず出してくださいッス……♡ ムッチュッ〜〜っ！！」

それを射精の合図と捉えた後輩は、口づけをさらにディープなものにして、手の動きを最速にしてとどめをさしてくる。唇を強く密着させて舌を吸い込みながら、とてつもなく情熱的で激しい愛撫を放ってくる。

「んちゅっ、んんっ、んぱあ、んんっ、んんっ〜〜♡」

俺はその動きに合わせて唇に吸いつきながら、最後の我慢をしてエネルギーを充填するように高めていった。

ペニスに力をいれてギュッと耐えに耐えていき……、最後に力を一気に緩めてやって、溜めた精液を発射していった。

ドプッ……！！ ドピュッ……！！ ピュルル……！！

俺は普段の何倍の量も射精して、その解放感にうっとりとした。

「……！！ ……ちゅっ、……ちゅっ……♡」

大量の濃い精液は後輩のお腹にたっぷりとかかった。それに合わせて手コキとキスはじょじょに緩やかなものになっていく。

「……ちゅっ、ちゅう……♡」

俺が恍惚感に^{ひた}浸っていると、それを邪魔しないようにしばらく余韻を楽しませるような口づけが続いた。ゆったりとした時間が流れていって、後輩のことがとても愛おしく思えてくる。

「ちゅっ……♡ ちゅっ、ちゅっ……」

射精とともに身体は緊張モードからリラックスモードへと切り替わり

脱力感が身体を支配していった。充実感を得ながら身と心を休めていくと、後輩が誇らしげに口を開いた。

「……ふーっ、どうだったッスか♡」

後輩は満足げな声と顔をしていた。最高だったよと返す。

「悦んでもらえてこっちも嬉しいッス♡」

本当にこんなに悦ばされて、なんてテクニックなんだと感心した。

「えへへへ……、……って、わ、わわわ」

後輩の視線が下の方に移っていき、大量の精液をかけられた自身の腹部を見ると悲鳴をあげた。

「こんなに出すなんて聞いてないッスよー！」

叫ぶ後輩はどこか嬉しそうだった。自分でも物珍しいものを見た気分になったので気持ちはわかる。

「もう、こんなに汚しやがりました……♡」

後輩は床や椅子に飛び散った精液はティッシュでふき取り、服や肌にかかった精液には顔を近づけて吸いつき後始末をしていった。後輩の口に精液が入る様子はなんとも卑猥で、また興奮してしまいそうだった。

「あ……、いいッス。いいッス。先輩はお疲れでしょうから……。そのまま休んでいていいッスよ～♡」

自分も掃除を手伝おうとするも、遠慮されてしまったのでその仕事ぶりを眺めていった。精液は広範囲に飛び散っていて、大量のティッシュが必要になっていた。ほんとずいぶんと盛大に射精したものだ。

「お疲れ様ッス先輩。あ、忘れてたところがあるッス～、パクウ……」

あっと声をあげる間もなく、後輩はペニスに吸いついていた。

「じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼっ……♡ んひひひっ……」

下半身を丸出しにして完全に油断していたのが悪いのだが、加虐的なお掃除フェラが始まってしまっていた。

萎えていたペニスは射精後の敏感な状態で口内でむくむくと大きくな

り、あ、ああ……、と声が出そうになる。

「レロ……、じゅぽっ！ レロレロレロ……♡」

そのフェラチオは最初から激しく、いきなり強烈な快感を食らい感覚がおかしくなりそうだった。それを見て後輩が悪い笑みを浮かべる。

が、しかし……。

「チュッチュツ……、はあ……、チュポン♡ あれあれえ？ さっき出したばかりなのに、また辛そうな顔してどうしたんスか〜？」

後輩はフェラチオを急遽^{きゅうきょ}打ち切って完全にストップさせた。

「お掃除終了ッス〜♡」

あくまでさっきのはお掃除で、気持ちよくするためにしたわけじゃないという体^{てい}をしていた。

俺は怪訝な顔で睨みつけながら、ありがとうと皮肉を口にする。

「いえいえ、ごちそうさまッス♪」

後輩はあっけらかんととぼけてきて、俺は顔がこわばってしまう。

「ん〜、なんスか先輩〜♪」

後輩が挑発するような笑みをうかべてきたので、敵^{かな}わないなと思いを話を逸らすことにして、精液を飲んでも大丈夫なのかと聞いた。苦かったり嫌だったりしないのだろうか、さっきから気になっていたのだ。

「あ、それなら問題ないッス」

後輩は無表情でタンブラーにALC. 40%のウイスキーをドバドバと注ぎ……、

「こいつで消毒すれば大丈夫ッス〜！」

水かジュースかのようにグイッとストレートで呷るのだった。